慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

第19回慶應赤倉アカデミー（KAA）

「Beyond Borders」

三四会赤倉山荘担当理事　深川　和己（68回）

KAAは2006年に始まり、2021年に慶應義塾の学生公認団体となり、三四会が後援しています。今回は第19回目の開催でした。

今年のテーマは「Beyond Borders」という、グローバル時代にふさわしいテーマでした。

北里図書館前にて三四会武田純三会長と門川俊明KAA会長から訓示をいただき、2台のバスでクイズなどのレクリエーションをしながら赤倉山荘を目指しました。

赤倉の体育館で学生たちの心を揺さぶる熱いレクチャーをしていただいたのは、医学部呼吸器内科福永興壱教授、看護医療学部深堀浩樹教授、薬学部齊藤義正教授に加え、山内慶太常任理事という4名の講師陣でした。日本人としての誇りを持ちながら世界で活躍しよう、本業がしっかりしていれば世界でも認められる、出会いが人生を変える、人との繋がりを大切にしよう、自身のボーダーもこえよう、慶應義塾の学際的環境を楽しみ、生かして将来の宝物にしてほしい、などのお話をいただきました。

医療系3学部の学生たちの心に大きな影響を与えた1泊2日となりました。

未来を垣間見ることができたことに、心より感謝申し上げます。新しい可能性と未来への挑戦を忘れずに、今回参加された学生の皆さんのさらなるご発展を心から祈念申し上げるとともに、いつかともに働ける日を楽しみにしています。

【KAA会長】

医学教育統括センター　門川　俊明（70回）

9月7日、8日と慶應赤倉アカデミーが開催されました。コロナ禍以降、昨年に続き、現地開催が出来、たくさんの学生の笑顔に包まれた2日間でした。

今回は、山内常任理事、医学部福永先生、薬学部斎藤先生、看護医療学部深堀先生をお迎えし、「Beyond Borders：グローバル時代での働き方改革」と称した講演をいただきました。留学などの経験を元に、先輩方がどういうキャリアをたどってきたか、とても興味深い話が聞けました。懇親会では、不肖、私が先日、イギリスのワインの最高位の資格、WSET diplomaを取得した知識を活かし、ワイン教室をおこなわせていただきました。三学部合同教育も重要ですが、KAAも3つの学部の学生同志を強く結びつける貴重な機会と思います。

今年から、慶應赤倉山荘の管理人をお勤めいただいている川本さんご夫婦のホスピタリティとおいしいお食事でおもてなしいただきました。ありがとうございます。

出発前に北里図書館前にて

無事山荘に到着

どこにいても笑顔が溢れる

【ゲスト講師①】

第19回慶應赤倉アカデミー（KAA）に参加して

内科学教室（呼吸器）教授　福永　興壱（73回）

今年2月にKAAから講演依頼のメールを頂き、歴史ある本会よりお声がけ頂けたことに驚くとともに、大変光栄に感じました。医療系3学部の活気あふれる学生の皆さん、深川先生、門川先生をはじめとする世話人の皆様、そして講師陣の先生方と過ごした1泊2日の旅は、想像以上に楽しく充実したものであり、東京に戻ってからもしばらくその余韻に浸っていました。

今回のテーマは「Beyond Borders」。まさにこれから物理的にも精神的にもチャレンジ精神を持って壁を越えようとしている若い皆さんの熱い気持ちに触れることができ、慶應の輝かしい未来を垣間見ることができたことに、心より感謝申し上げます。

【ゲスト講師②】

団欒談笑の楽しさ

常任理事　山内　慶太（70回）

慶應赤倉アカデミーにはじめて参加致しました。往復のバスも含めて、団欒、談笑の楽しさを参加者一人一人が実感する二日間でした。

これも、運営に携わった学生諸君の工夫と、それを支えていた三四会員の方々のお蔭です。行き往路のバスでのクイズ等、団欒をしやすくする雰囲気作りも見事でした。

私は「グローバル化が進む現代における働き方ーマルチリンガルを楽しむー」と題して講演しました。慶應義塾の学問の特色、学際的環境を歴史的に紹介した上で、医療においては、職種毎に自己完結的教育課程の中で養成されることから、互いの異なる視点と「言語」を共有する為にも学際的環境に身を置くことが大切であると話しました。

そして、医療系三学部の交流だけでなく、医療以外の学部まで、学部・キャンパス・世代を超えた幅広い交際を大いに愉しんで欲しいと結びました。

このような話をしたからか、深夜に及ぶ懇談では、学際的環境の中でクラブ活動等に打ち込んでいる様子も色々と聞けました。総合大学としての慶應義塾の環境を生かして益々活発な塾生生活をとの思いを深くしました。

【ゲスト講師③】

垣根を超える体験に感謝

看護医療学部教授　深堀　浩樹

第19回KAAにお招きいただき、2024年夏の大きな思い出となりました。参加者が快適に過ごせるよう、レクリエーション、講演、食事、懇親会、ドッヂボール、表彰式、といった多くの活動を細やかに準備していただいた実行委員の方々に感謝です。

グローバル時代の働き方をお題とした講演では、普段の授業ではあまり話さない学生時代の部活動や海外での生活の様子なども含めたこともあってか、参加者の熱意を感じながら、自分も楽しくお話させていただきました。懇親会やレクリエーションでは3学部の皆さんとキャンパスとは異なる雰囲気で交流することができ、"Beyond Boarders"を実感しました。KAAで学部の垣根を越えて培われたつながりが、将来皆さんがそれぞれの持ち場で活躍していくための財産となると確信しています。

私にとっても学部の垣根を越えて学ぶことの多い大変楽しく有意義な体験でした。看護医療学部の教員・学生にお勧めしていきたいと思います。

【ゲスト講師④】

人との出会いを大切に

薬学部教授　齊藤　義正

お揃いのポロシャツを着て、バスで赤倉山荘まで移動し、夜中までお酒を酌み交わしながら人生について語り合う、まるで学生時代に戻ったような素敵な2日間を過ごさせていただきました。実行委員の皆さんも準備などいろいろと大変であったと思いますが、本当にありがとうございました。

私自身も今回の講演を通じて自分のキャリアを振り返る良い機会となりました。

改めてこれまでのキャリアを振り返ってみると、本当に多くの上司、先輩、同僚にお世話になったことを実感します。人生の節目において、部活動の先輩や職場の上司からのお誘いやアドバイスが私の人生を決めて行ったと言っても過言ではありません。世の中がどんなにグローバル化しようとも、結局は人との出会いや泥臭いタテとヨコの繋がりが何よりも大切なのではないでしょうか。私の拙い講演ではありましたが、学生の皆さんのキャリアパスのヒントになれば幸いです。

それにしても医療系3学部の学生のパワーには圧倒されました。我が国のチーム医療の未来はとても明るいことを確信しました。体を鍛え直してまた皆さんとドッチボールができる日を楽しみにしております。

【KAA OB】

「半学半教」な二日間

慶應赤倉アカデミーOB　秋葉　庸平（94回）

今回私はKAA　OBとして第19回KAAに参加させて頂きました。

講師の先生方のご講演は社会人にとっても貴重な学びの時間となり、私自身も将来に向けての指針を見つけることができました。また、医療系三学部の学生と意見を交わす中で、彼らの将来についての大きな期待と少しの不安を肌で感じ、彼らが不安を払拭して飛び立てるよう、当時のKAAで学生であった私に向き合ってくださった先生方のように私も自分自身の経験を彼らに飾り気無く伝えました。それと同時に、私自身も彼らから最近の学生生活の変化や彼らの考え方を学ぶことができ、大きな刺激となりました。

このように、社会人になっても多くを学ぶことができると同時に微力ながらも学生の成長のお手伝いができる本企画は「半学半教」の精神を体現する企画であると改めて実感しました。最後になりますが、講師の先生方をはじめ、本企画を支援し、温かく見守ってくださっております皆様に心より感謝申し上げます。

【第19回KAA学生代表】

医学部5年　堺　優真（5年）

第19回KAA学生代表を務めさせていただきました。今年度は、物価高騰の影響を受けた中で、OBOGや三四会から多大なご支援をいただきました。また、忙しい中ご参加いただいた先生方、参加者の皆様、そして共に準備を進めてくれた先生方や委員の皆さん、多くの方々の支えのおかげで、1泊2日の現地開催を実現することができました。心より感謝申し上げます。

今年のテーマは「beyond borders」でした。講師の先生方からは、留学経験や国際的な社会で活躍するために学生が身につけるべき視点についてのご講義をいただきました。また、医学部、薬学部、看護医療学部の学生同士や先生方が、垣根を越えて真剣に語り合い、将来や夢について深く話し合う貴重な場となりました。笑い合い、支え合うことで、新たな絆が生まれたことも今回の大きな成果だと感じております。

来年度のご参加もぜひお待ちしております。必ずや充実した経験ができます。

【参加学生】

医学部5年　冨本佳宏

信濃町で乗り込んだバスには、初対面の先生や医療系三学部生、とても緊張していました。しかし様々なレクリエーションや先生方のご講演、懇親会を通して、肩書きや学部や学年にとらわれず、将来の話からプライベートな話まで語り合うことで、次第に参加者の皆さんと心が打ち解けました。ただ楽しいだけでなく、普段接することができない方々と交流することで将来について改めて考え直す機会となり、一生の思い出となりました。

薬学部4年　砂野礼至

去年の参加者が激推してくれて参加した慶應赤倉アカデミーは、濃密な一泊二日でした。移動バス内でのレクリエーション・先生方の貴重なご講演・深夜まで続いた先生方や他学部との話し合い・ドッチボールなど、どれも一生の思い出となり、特にご講演では、先生方の海外経験に関するお話で、人とのつながりがとても重要だと改めて再認識しました。貴重な体験をありがとうございました！

看護医療学部3年　原田梨那

授業の時にアナウンスを受け、医療系三学部でもっと気軽に関わってみたいという理由で訪れた赤倉セミナーはとても楽しく学び多いものであった。普段授業をしてくださる先生方と身近に話し、意見をいただいたり、今まで関わったことがない他学年の方、医学部薬学部の方と出会え、みんなでドッジボールをしたり、飲み会で盛り上がれたことは私にとって非常に貴重な機会であった。また、来年チャンスがあればぜひ参加したい。

IMA第47次派遣団活動報告

医の原点を体験、大きく成長

団長　長谷川　康（外科学（一般・消化器）81回）

2024年7月14日、慶應義塾大学医学部国際医学研究会第47次派遣団は日本を出発し、ブラジルとボリビアでの44日間にわたる活動を終え、8月26日に無事帰国しました。団員たちはアマゾン河巡回診療船での医療支援や、先住民族村での伝統医療の体験を通じて、非常に貴重な学びを得ました。

サンパウロでは、日伯学生会議に団員たちがポルトガル語での発表を行い、その内容は高く評価されました。また、サンパウロ大学病院を訪問し、私も団長としてポルトガル語で講演を行いました。その際、以前の学会で私の講演を聞き、その手術を実践しているという外科医との再会があり、非常に感慨深い経験となりました。同日の夜には、サンパウロ三田会にも参加し、慶應義塾のつながりの強さに改めて感銘を受けました。

また、肥田リチャード雄史先生、フランク善史先生、ウィルソン貴史先生、レオ智史先生には非常に良くしていただきました。彼らと一緒に行動することで、IMAの活動が一層充実したものとなりました。私は彼らの仕事ぶりにも深く感心し、4人それぞれが異なる分野で活躍している中で、社会貢献や医療への強い情熱と使命感に心から刺激を受けました。

今年の活動には、中原仁会長が二泊三日の強行スケジュールで参加してくださいました。中原会長のコミュニケーション能力、英語力、そして行動力には深く敬意を感じました。ぜひ毎年参加していただきたいものです（笑）。

活動を通じ、団員たちは大きく成長し、私自身もその成長を間近で感じることができたことは、非常に喜ばしいことでした。今後も慶應義塾大学医学部国際医学研究会として、医療の国際交流と発展に貢献してまいります。どうぞ引き続きご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

【学生責任者】

阪埜裕理（6年）

この度第47次派遣団はブラジル・ボリビアにおける44日間の活動を終え、無事に帰国いたしました。昨年度はコロナ禍以前と同等の規模の活動を無事完遂し、本年度はCOVID-19パンデミック以前に本研究会が継続的に参加しておりましたアマゾン河流域の無医村を巡る診療船への乗船の再開などを目指し準備を重ねました。

ブラジルでの活動は、上述の巡回診療船での実習や先住民族村での伝統医療の見学、また現地病院での実習や大学におけるポルトガル語での発表などを行いました。日本とは大きく異なった環境での医療や、その格差を目の当たりにし経済的に困窮した状況で医療を提供することの難しさを肌で実感するとともに、どのような地域であっても人を想い治療しようとする姿に医の原点を感じることができました。

ボリビアではサンタクルスとラパスという二つの都市で活動を行い、それぞれの地域で医療機関の見学や日系人移住地の見学などを行いました。こちらの施設においても現地での医療を拝見し、特に結核などの感染症対策の不十分さを目の当たりにし、日本にいるとあまり考える機会のない環境が疾患を大きく形作るという事実を再認識することができました。

今夏の活動において、ブラジルとボリビアの各地で出会う皆様は非常に温かく私共を迎え入れてくださり、47年間続く本研究会のご縁に心から感謝すると同時に歴史の重みを痛感いたしました。世界各地において、それぞれの環境に適した様々な形で医療に貢献する皆様を拝見し、大変感銘を受けるとともに、医療に貢献する方法はこんなにも幅広いのだということを学ばせていただきました。

学生最後の夏休みに経験させていただいたことを糧とし、どのような状況においても熱い志を持ち、人一倍努力し、広く医療に貢献できる医師になることを心から誓います。

最後に、私どもの活動を支えてくださった全ての皆様方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

【会計】

藤塚晴紀（6年）

私たち第47次派遣団は、多くの皆様の温かいご支援を受け、ブラジル・ボリビアでの今夏の活動を成し遂げることができました。この貴重な経験を通じて、私の価値観は大いに広がりました。

特に印象深いのは、日本と南米における医療アクセスの格差です。日本では病気にかかると迅速に専門医の診察を受けることができますが、アマゾン地域の住民は、緊急時にボートで都市部へ向かうか、数ヶ月に一度の巡回診療を待たざるを得ない厳しい現実があります。都市部においても、経済的に困窮する層は、全ての診療が無料で提供される公的医療制度（SUS）を利用し、長い待ち時間を経て診療を受けていますが、裕福な層はプライベートの保険に加入し、高級な病院で即座に診療を受けることが可能です。このような現実を目の当たりにし、日本の皆保険制度のもとで享受される医療の平等性について多面的な考え方を得ました。

また、訪れた全ての活動地で、現地の方々が初対面にもかかわらず温かく迎え入れてくださり、文化や言語の違いを超えて心の交流が可能であることを実感しました。彼らの力強さと明るいエネルギーは印象的で、「人生一度きりだ」という言葉が心に刻まれました。特に、現地の子供たちが地元の踊りやお祭りを楽しむ姿が胸を打ち、物質的な豊かさが日本と異なる中で、真の「幸せ」とは何かを考えさせられる機会となりました。

現地の人々の温かさに触れながら、南米に残る医療問題を目の当たりにし、将来医師として何らかの貢献をしたいという思いが一層強まりました。本研究会での2年間の多岐にわたる活動を通じて得た経験は、OBOGの皆様、企業の皆様、そして本研究会に関与してくださった全ての皆様のおかげであると深く感謝しております。この2年間の活動が私自身を大きく成長させたことは間違いありません。本研究会の一員として活動できたことを誇りに思い、今回の経験で得た学びを礎にして、今後とも精進してまいります。

【渉外】

原田沙也加（6年）

皆様方より賜りました多大なるご援助により、第47次派遣団は今夏の活動を無事に完遂いたしました。ブラジル、ボリビアでの44日間は、一瞬一瞬が目新しく刺激的で、自らの人生観そのものを揺るがすような体験の連続でございました。

私どもは本研究会の設立趣旨に基づく目標である「医の原点の実体験」を掲げて活動を行っていました。活動を終えた今、「医の原点」とは、目の前の患者について深く理解し、一人ひとりにとっての最善の医療のあり方を追求することであると感じています。

巡回診療船では、アマゾン河流域の無医村を回り、限られた医療資源での診療を行いました。血液検査の設備を有する最寄りの病院まで高速船で1時間以上かかるこの環境において、日本と同様の頻度で検査を行い、確定診断をつけることは必ずしも最善ではありません。患者を取り巻く環境を深く把握した医師だからこそ、限られた医療資源でも地域の健康を守っていけるのだと実感いたしました。先住民族村を訪問した際には、伝統医療と西洋医学の共存を図る伝統医バジェの姿に感銘を受けました。バジェは伝統医療での治療が難しい患者に西洋医学を薦めることがあり、バジェが常に最善の医療のあり方を追求し、それに対し患者が全幅の信頼をおいているからこそ成り立つ関係であると感じました。

現地では、多くの方々に格別のご厚情を賜りました。特に、以前慶應義塾に留学なさっていた日系人医師の先生方が皆様口を揃えて、「慶應義塾に非常にお世話になったから恩返しをしたい」と私どもを温かく受け入れてくださり、地球の裏側においても慶應義塾のつながりを痛感いたしました。私どももこの度賜りましたご温情を心に深く刻み、御恩に報いることができるよう精進してまいります。

最後に、学生最後の夏休みにこのような貴重な経験をさせていただきましたことは、OBOGの先生方をはじめとする本研究会に携わってくださった全ての方々のご支援、ご指導の賜物でございます。この場をお借りいたしまして心より感謝申し上げます。

ボリビアでは母子保健をテーマに活動

先住民族集落訪問

アマゾン河巡回診療船の皆様と

第47次派遣団（ボツカツにて、左から長谷川団長、中原会長、阪埜、藤塚、原田）

第104回 慶應医学会総会・シンポジウム

日　時　2024年11月30日（土）13時30分～18時00分
場　所　慶應義塾大学　北里講堂（信濃町キャンパス）
主　催　慶應医学会
共　催　慶應義塾大学医学部
シンポジウム　『mRNAワクチン』

2019年末に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックは全世界で脅威をふるい、当初は人類の存亡に関わる様相を呈していました。欧米の主要都市の一部はほぼ医療崩壊に至り、重症化や死亡の頻度が比較的少ないとされていた日本でも救急医療体制が逼迫しました。この危機的新興感染症との闘いに大きく貢献したのがmRNAワクチンです。従来のワクチン開発の常識を超えた異例のスピードで、感染成立に寄与する原因ウイルスSARS-CoV-2のスパイクタンパク質をコードするmRNAワクチンが開発され、パンデミック発生から1年程で実用化に至りました。立役者であるカタリン・カリコ博士が2021年に慶應医学賞を、2023年にはノーベル生理学・医学賞を受賞したのは記憶に新しいところです。パンデミックが収束した現在でも重症例の発生やlong COVIDとも称されるCOVID-19後遺症の問題が存続しており、mRNAワクチンのさらなる進化が求められています。

今回、第104回の慶應医学会シンポジウムでは、mRNAワクチン研究の現状と展望について、mRNA創薬とワクチン免疫の２つの視点から議論するべく、それぞれの第一線で活躍されている方々をお招きしてシンポジウムを行うことに致しました。

前半では、慶應義塾大学医学部名誉教授・Elixirgen Therapeutics, Inc. Chief Scientific Officerの洪実先生に「自己複製mRNAは、次世代のワクチンとなりうるか？」を、慶應義塾大学医学部准教授の涌井昌俊先生に「COVID-19 mRNAワクチン被接種者における免疫獲得に関する解析」を、京都大学iPS細胞研究所未来生命科学開拓部門教授の濱崎洋子先生に「COVID-19 mRNAワクチン接種による免疫応答の年齢差・個人差の理解」を、後半では、第一三共株式会社 研究開発本部研究統括部ワクチン研究所所長の武下文彦先生に「新規LNP-mRNAワクチンプラットフォーム技術による国産ワクチンイノベーション」を、大阪大学大学院医学系研究科教授の熊ノ郷淳先生に「免疫記憶～自然免疫記憶と神経・免疫・代謝連関の話題を含めて」をご講演いただきます。COVID-19のみならず、他の感染症やがんをはじめ様々な疾患への応用と実践の期待が寄せられているmRNAワクチンに関する講演を大変楽しみにしております。mRNA創薬とワクチン免疫のクロスオーバーによるこの領域の進歩に触れていただく貴重な機会となると考えております。是非多くの方々にご参加いただき、mRNAワクチンの未来について一緒に考えていただければ幸いです。　（塩見春彦、涌井昌俊）

鑑賞知来

医療法人慶聰会を設立し、渋谷区代々木上原と埼玉県北本市にクリニックを構え、はや9年になる。地域の方々が人生の最期まで安心して過ごせるよう、外来と訪問診療に注力してきた。訪問診療では、様々な患者さんに24時間365日対応するため、多くの多様な診療科の医師が必要である一方、質を担保するため、規模を拡大しすぎないよう注意してきた。現在43歳。今後30年の発展を慎重に思案している。

先日、母校の志木高が開校75周年を迎え、記念事業である光彩館の竣工式典に招かれた。そもそも志木高は、電力産業に貢献し、近代三茶人としても知られる塾員の松永安左エ門氏から寄贈された土地建物を基に開校した。卒業生の寄付によって建設された光彩館は、音楽室や茶室、多目的ホール等を包摂し、今後多いに活用され、過去、現在、未来の慶應生を繋ぐ、時を超えた人間交際の場となるだろう。

志木高時代、学識豊かな教師等から紹介された数多の専門書により、新たな世界に導かれた。「推理小説は文学たり得るか」というテーマの下、江戸川乱歩や松本清張を読み込み、高浜虚子の花鳥諷詠の俳句の世界や三島由紀夫の作品群で文学的感性を養い、内省を深めた。また、マックス・ヴェーバー、フリードリヒ・ハイエク等で経済思想にも触れた。とりわけ、ショウペンハウエルの『読書について』や小泉信三先生の『読書論』等により、読書人としてのあり方を学び、過去に生きた著者との対話という読書の醍醐味を知った。こうした経験は、感性や論理的思考を磨き、真善美を探求する際の道標となっている。

この先30年も、過去の文明の遺産を享受していることを肝に銘じ、患者さんやご家族が安心して過ごせるよう医療貢献し、学生や後輩等が未来に希望を持てるよう、価値ある遺産を次世代に引き継ぐ一助となるよう、微力を尽くしたいと思う。

（矢澤クリニック渋谷／矢澤クリニック北本　理事長　矢澤聰　85回）